

生活科において児童と動物との間に互恵関係を企図して 取り組む動物飼育活動の効果

米岡 洋*・木村 吉彦**

(平成26年9月30日受付；平成26年11月5日受理)

要 旨

小学校生活科において動物飼育活動が多く実践されている。『小学校学習指導要領解説 生活編』では、「身近な動物や植物に興味・関心を持ち、それらが生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、動物や植物を大切にすることができるようにする」と示されており、児童に生命を尊重する心情をはぐくむことの必要性が示唆されている。児童が飼育する動物に対する愛着をはぐくみ、大切にしようとする態度を身に付けさせるためには、漫然と飼育するだけでは十分な成果は期待できない。そこで、児童と動物の間に、互いにメリットを得られるような「互恵関係」を築くことで、児童の動物への接し方や愛着の高まりにどのような効果が見られるかについて研究をすることとした。1年生児童とポニーとの間に「乗馬をする－世話をする」の互恵関係を、1年生児童と羊との間に「羊毛を刈り取って受け取る－世話をする」の互恵関係を企図して飼育活動を行い、児童の行動やつぶやき、作文の記述等を多面的に分析した結果、児童が動物に対する感謝や尊敬の気持ちを持ち、より愛情深く接する姿が見られた。このことから、動物飼育において、児童と動物との間に互恵関係を企図することにより、児童は動物に対してより深い愛着を示すことが分かった。

KEY WORDS

Living Environment Studies 生活科, Animal Breeding 動物飼育, Mutually Beneficial Relationship 互恵関係, Life Respect 生命尊重

1 はじめに

生活科の学習の内容として、『小学校学習指導要領解説 生活編』（以下『解説 生活編』）の内容（7）では動植物の飼育が挙げられている。ここでは繰り返し動植物とかかわる息の長い活動を設定することの大切さが述べられており、「継続的な活動をすることによって、親しみの気持ちが生まれ、責任感が育ち、生命の尊さも感じることができると示されている⁽¹⁾。新潟県上越地域では特にヤギや羊などの動物飼育活動が盛んに行われており、動物とのかかわりやふれあいを通して児童に生命を尊重する心情を高めたり、世話をやり遂げる達成感を味わったりすることをねらいとした実践が見られる。その反面、児童が当番活動をこなすだけの単調な実践になってしまったり、学年児童の数に比べて飼育する動物の数が少ないため、動物に触れ合う機会が限られてしまったりしたことで、ねらいを十分達成できない実践も散見される。北原（2010）は、1年生の学級でヤギ2頭を飼育する際、毎月1回「ヤギさんパーティー」を開き、ヤギの発育測定を実施して成長を確かめたり、ヤギと自分たちが楽しめるプログラムを児童自ら企画し運営したりする活動を繰り返すことで、ヤギへの愛着だけでなく、友達同士のつながりも強まったことを報告している⁽²⁾。単に動物を長期的継続的に飼育するだけでなく、児童が動物に心を寄り添わせ、思いや願いを実現する活動を工夫することで、ねらいに迫っていく実践の必要性が求められる。

そこで、本研究では「互恵関係」に着目する。互恵関係とは、互いに利益を与え合う関係のことを指す。生活科においては、『解説 生活編』の内容（8）の伝え合い交流する活動において特に重視される考え方である。木村（2012）は、幼小連携の視点として「異校種間連携にとってのキーワードは、『相互理解』と『互恵性』（お互いにメリットが見いだせる活動。具体的には交流授業など）である」と述べている⁽³⁾。具体的には、生活科の「おもちゃを作って遊ぶ」の単元で、工夫しておもちゃを作って遊んだあと、おもちゃを使った遊びコーナーを設け、園児を招待して一緒に遊ぶ交流活動などがある。児童は幼児をおもちゃで遊ばせることで達成感を味わいコミュニケーション力を身に付ける利点がある。園児は遊びを楽しむと同時に、小学校の様子を知ることができ、入学への抵抗や不安を軽減できる利点がある。このように、児童と他者（人）との交流活動においては互恵関係を重視した実践が行われて

*上越教育大学（専門職学位課程） **学校教育学系

いるものの、児童と動物とのかかわりに互恵関係を企図する実践やその効果について述べている事例は見られない。そこで筆者は、この互恵関係を動物飼育においても取り入れることで、児童と動物との間に、単に「世話をする－世話をされる」という関係以上の関係を築くことができるのではないかと考え、本研究に取り組むこととした。

2 研究の目的

生活科における動物飼育单元において、児童と動物との間に互恵関係を企図して活動に取り組んだときの児童の動物とのかかわりや動物に対する心情の変容について考察し、互恵関係を企図することが児童にどのような効果をもたらすかについて検証する。

3 研究の対象と方法

3.1 研究対象

本研究における研究対象実践は次のとおりである。

研究対象実践：新潟県上越市J小学校1年1組37名、生活科「ひろがれ！トライパーク」（平成21年度筆者実践）
新潟県妙高市A小学校1学年 1組30名2組31名 計61名、生活科「いきものだいすき」
（調査期間：平成25年9月～12月）

3.2 研究方法

3.1で示した児童と動物との間に互恵関係を企図した実践において、児童の動物に対する行動観察やつぶやき等の見取り及び作文への記述の分析を行い、動物飼育活動において互恵関係を企図することが児童に与える影響や成果について考察する。

4 実践事例1 生活科「ひろがれ！トライパーク」の実践と考察

4.1 生活科「ひろがれ！トライパーク」の実践の概要

筆者が平成21年度に実践した「ひろがれ！トライパーク」は、ポニーを飼育する牧場を中心として、学校の原っぱに自分たちの居場所である「トライパーク」を作る活動である。長期にわたってポニーを飼育することで、生命の尊さに気付き、根気強さを身に付け、達成感を味わうことができるようにすることをねらいとした。年間の活動の流れは表1のとおりである。

表1 1年生活科「ひろがれ！トライパーク」年間活動計画

1学期	○学校探検をしよう（飼育小屋を発見し、動物飼育に関心をもつ） ○牧場でトライ（上越市内の牧場に出かけ、ポニーと触れ合う） ○ポニーを迎える準備にトライ（学校の原っぱに牧場（小屋、柵）を作る、牧場の人に世話の仕方を習う） ○ふれあいにトライ（日常の世話や引き馬、乗馬にトライする）
2学期	○トライパークをひろげよう（牧場をリニューアルする） ○乗馬にトライ（1人乗馬、早足乗馬などにトライする） ○トライパークにご招待（他学級児童や幼稚園児を乗馬に招待する） ○ポニーさんありがとう（ポニーとのお別れ会を行う、牧場の後片付けを行う）
3学期	○ポニーさん元気かな？（牧場に帰ったポニーにあてて手紙を書く） ○思い出をまとめよう（思い出を文集やすごろく、絵などで表現する）

4.2 本実践における児童と動物との間に企図する互恵関係について

ポニーを飼育する最大の魅力は乗馬をすることができることである。児童はポニーの世話に取り組む中で、「ポニーの背中に乗ってみたい」「いつか自分一人でポニーを操って乗馬ができるようになりたい」と思いや願いをもつと推測される。そこで、ポニーに「乗る」のではなく、「乗せてもらう」という意識をもたせ、ポニーの世話への意

欲を高め、ポニーへの愛着を深めさせたいと考えた。そこで、児童はポニーに乗馬できるというメリットを、ポニーは児童から愛情込めて世話をしてもらおうという互恵関係を企図し、実践に取り組むこととした。図1に児童とポニーとの間に企図した互恵関係を示す。

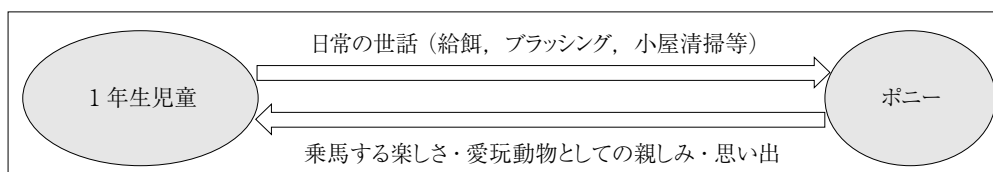


図1 児童とポニーの互恵関係

4. 3 実践における児童の姿と考察

4. 3. 1 ポニーの飼育を心待ちにしていたA男

6月2日、長野県蓼科牧場から1頭のポニーが学校へやってきた。この日から1年生37名でポニーの飼育活動が始まった。筆者は児童とポニーの互恵関係を企図するために、牧場のスタッフ（以下スタッフ）の存在を生かすこととした。具体的には、スタッフから児童に対してポニーの世話の仕方や飼育上の注意点、乗馬技術を教えてもらう機会を意図的に設定し、ポニーに接する際の心構えを学ばせたいと考えた。なぜなら、スタッフはポニーの専門家であり、その言葉には説得力がある。教師が指導するよりも、納得して話を受け止めることができるのである。

A男はポニーが学校にやってくるのを心待ちにしていた児童の一人である。もともと動物が好きであったA男は、ポニーを飼育することが決まり、誰よりも喜んだ。そして、柵の設置や馬房（ポニーの飼育小屋）づくりにも意図的に取り組んでいた。スタッフがポニーを連れて学校を訪れた際、スタッフから世話の仕方について説明を受けた（写真1）。その時、スタッフは児童にこう話した。「ポニーはとても頭のいい動物です。みんなが心を込めてお世話をすれば、ポニーはちゃんとわかってくれます。そうするとポニーは『ああ、この人はお世話をしてくれるから、言うことをきこう』『この人はお世話をしてくれないから、言うことをききたくない』って、ちゃんと考えるのです。だから、みんなは、今日からポニーのお父さんお母さん代わりなので、心を込めてお世話をして、ポニーと仲良くなってくださいね。」

A男はスタッフの話真剣な表情で聞いていた。A男は次の日から毎朝登校するとすぐに原っぱへ行き、ポニーに朝の挨拶をし、餌を与えることが日課となった。A男は「ポニーと仲良くなりたい、ポニーと心を通わせたい」と願い、そのためには毎朝ポニーのところへ行き、声をかけることでポニーに自分のことを覚えてもらいたいと考えたのである。後日、A男は活動を振り返る作文に次のように記述している。



写真1 スタッフから説明を受ける児童

ぼくじょうの人がポニーをつれてきてくれました。ぼくはポニーを見てとてもびっくりしました。本とうに、学校にポニーが来たからです。びっくりしたけど、ぼくはとてもうれしかったです。それからまい日ポニーのおせわをしました。ぼくは、ポニーと心がつじあったみたいな気持ちになって、とてもうれしかったです。（A男）

A男はこの作文で、本当に学校でポニーを飼育できるという喜びだけでなく、毎日の世話やふれあいを通して、ポニーと心を通わせることができた満足感や喜びを表している。スタッフから、ポニーと心を通わせることの大切さを聞き、それを達成しようと取り組んだことにより、A男はポニーへの愛着を深めたと考える。

4. 3. 2 引き馬での乗馬に挑戦するB子

ポニーの飼育を始めて3週間がたち、ポニーの世話にも徐々に慣れてきた。これまで児童はポニーを連れて散歩をする「引き馬」に取り組んできた。B子は、引き馬も楽しいけれど、やっぱりポニーに乗ってみたいという思いが日に日に強くなっていった。B子同様、児童全員がポニーに乗ってみたいと願ったことから、教師は再度スタッフを学校に招き、乗馬の仕方について教わる活動を設定した。

6月26日、スタッフが来校し、乗馬の仕方を習う活動を行った。鞍などの馬具の付け方や手綱の持ち方、姿勢などについて一つ一つ丁寧に教えていただいた。B子はいよいよポニーに乗れる時が来たかと、わくわくしながらスタッフ

の説明を聞いていた。スタッフは一通り説明を終えると、最後に児童にこう話した。「ポニーに乗るときには、ポニーの首筋をポンポンとたたいて、『よろしくね』『乗せてね』と声をかけましょう。乗馬が終わってポニーから降りる時も、またポニーの首筋をポンポンとたたいて『乗せてくれてありがとう』と必ず声をかけてから降りてください。これは約束ですよ。」B子はスタッフの話聞いてはっとした。B子はポニーが大好きで、乗馬がしたいと心から願っていた。しかしそれは、例えば自転車や遊園地のアトラクションに乗るような、自分だけの楽しみとしての願いであり、ポニーに声をかけるという考えがなかったことに気付いたからである。

いよいよB子が乗馬をする順番になった。B子はスタッフに言われた通り、ポニーの首筋をポンポンと2回たたき、「乗るからね、よろしくね」と声をかけて乗馬をした。いつもより高い目線、パカパカとリズムカルに揺れる振動、B子は少し緊張しながらも、笑顔で牧場を1周することができた。ポニーから降りる際、B子はポニーの首筋を再度ポンポンとたたき、「ありがとう」と元気よく声をかけ、次の児童と入れ替わった(写真2)。

この活動の後、それまでは世話自体を楽しく、遊びのようにとらえていたB子たちは「乗せてもらうんだから、ちゃんとお世話をしなきゃ」「ポニーが喜んでくれるように馬房をきれいに掃除しよう」と、互いに声をかけながら世話に取り組むようになった。B子は1学期の活動を振り返り、作文に次のように記述した。



写真2 乗馬後ポニーに声をかけるB子

ポニーにのったらながめがいいです。さいしょはこわかったけどのれるようになりました。じょうばをするといいきぶんになれるから、「いいな〜」とおもいます。たくさんのせてくれたポニーにありがとうのきもちです。(B子)

この作文からは、乗馬をさせてくれたポニーに対するB子の感謝の気持ちを見て取ることができる。このように、乗馬をしたときの喜びや楽しさに対する感謝の気持ちを、一生懸命お世話をすることでポニーに返そうとする姿から、児童とポニーの間に良好な互恵関係が築かれていると考える。

4. 3. 3 1人乗馬に挑戦するA男とC子

9月11日、再度スタッフから来校していただき、一人での乗馬の仕方について指導してもらう活動を設定した。1学期までは、ポニーの両側に児童が立ち、危険のないように補助をしながらの乗馬であったが、2学期からは一人で手綱を操り、乗馬をする活動に挑戦するのだ。スタッフから、一人で乗馬する際のポニーの操り方について説明を受ける児童。一人での乗馬はこれまでの補助付きの乗馬に比べて難易度ははるかに高い。かかとでポニーの腹をけて進み、手綱を左右に引いて曲がり、「ハイ!」と声をかけると速く進むようになる。そんな中、スタッフから再度児童に向けて話があった。「ポニーが口にくわえている『はみ』という道具は金属でできているので、強く歯に当たるとポニーはとても痛い思いをします。手綱は急に引っ張らないで、ゆっくりと動かすようにしてください。ポニーと心を合わせれば、上手に乗れるようになりますよ。」C子は以前から、ポニーが口にくわえている「はみ」が、「痛そうだな、かわいそうだな」と思い、ポニーの様子を気にかけていた優しい児童である。一人乗馬に挑戦した際も、急な操作をしないように細心の注意を払いながら、優しく操作をしている姿が見られた(写真3)。



写真3 1人乗馬をするC子

ポニーを飼育する活動を終えた後、C子は振り返りの作文に次のように記述した。

1人のりをしたことがおもしろい出です。たづなをひっぱると、口にはみがあたっていたそうでかわいそうだったよ。あ、はみというのは金ぞくのついたひもです。いつもそれをする、いやがって、なかなかはみをつけるのができなかつたんだよ。(C子)

C子は、乗馬の楽しさだけでなく、乗馬の際には「わたしが乗るからきっと重いんだろうな、『はみ』が歯に当たって痛いんだろうな。でも乗せてくれてうれしいよ」という気持ちを常にもっていたのであろう。C子の、ポニーを心配しながらも、乗せてくれたことへ感謝の気持ちを抱いている様子がうかがえる。

ポニーに心を寄せ、世話に熱心に取り組んでいたA男も、上手に一人乗りができるようになった。A男は、夏休み中に、蓼科牧場に家族で出かけ、学校から一旦牧場に戻っていたポニーに会いに行き、世話や乗馬をしてきたほどであった。A男は振り返りの作文に次のように記述した。

ポニーには、いつもぼくのをせてくれてかんしゃをしています。ぼくのいうことをきいてくれたり、おなかをけるとちゃんとうごいてくれたり、まがるあいずをだすとまがってくれたりします。たづなをひっぱると、とまってくれます。ぼくのいうことをちゃんときいてくれてうれしいです。とてもたのしい思い出ができたのもポニーのおかげです。
(A男)

A男の作文からも、ポニーに対する感謝の気持ちが見て取れる。このように、ポニーに「乗せてもらう」という気持ちで接することで、ポニーに対する感謝や思いやりの気持ちを高めることができたと考える。

5 実践事例2 生活科「いきものだいすき」の実践と考察

5.1 生活科「いきものだいすき」の実践の概要

1年生の活動「いきものだいすき」は、学年で2頭の羊を飼育し、世話をしたりふれ合ったりする活動を通して、生命を尊重する心情をはぐくむとともに、当番活動にしっかりと取り組む責任感をはぐくむことなどをねらいとする活動である。年間の活動の流れは表2のとおりである。

表2 1年生活科「いきものだいすき」年間活動計画

1学期	○羊さんを迎える準備をしよう（羊小屋と柵を作る、羊さんの入学式を行う） ○羊さんと仲良くなろう（日常の世話活動、散歩活動）
夏休み	○羊さんの毛刈りに挑戦しよう（羊の毛刈りとシャンプーをする） ○夏休み中の当番活動（交代で羊の世話をする）
2学期	○羊さんと一緒に遠足に行こう（校区内の公園に羊と一緒に出かけをする） ○羊毛を使って工作をしよう（羊毛を使ってミニひつじ人形作り、絵画制作、リース作り） ○羊さんとの思い出をみんなに発表しよう（学習発表会で思い出を替え歌にして発表する） ○羊さんとお別れ（お別れ会を開き、感謝の気持ちを伝える）
3学期	○思い出を振り返ろう（羊牧場に手紙を書く）

5.2 本実践における児童と動物との間に企図する互惠関係について

羊を飼育する上で魅力的なのは羊毛の有効活用である。特に夏場に飼育する際には、羊毛を刈り取ることができる。羊毛は羊からの贈り物として様々な形に利用することが可能である。そこで、図画工作の時間に羊毛を使った表現活動を設定する。児童には羊からの贈り物であることを意識させ、羊との思い出をいつまでも残していきける「たからもの」を作ろうと投げかける。そして、造形活動を通して表現する喜びを味わわせるとともに、羊毛をくれた羊に対する愛着を深め、世話に一層熱心に取り組むことができるようにするのである。図2に児童と羊との間に企図した互惠関係を示す。

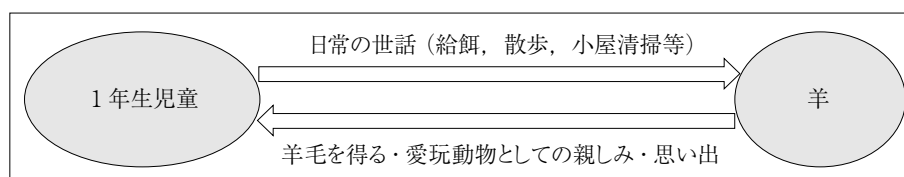


図2 児童と羊の互惠関係

5.3 具体的な実践の様子と児童の姿

5.3.1 羊の毛刈りとシャンプーをした達成感から世話の仕方が変容したD子

7月に2頭の羊を迎え、1年生の羊飼育活動が始まった。これまで大きな動物とふれ合った経験の少ないD子は、羊への恐怖心と、糞尿の臭いへの抵抗感から、なかなか羊に愛着が持てず、世話に対しても消極的な姿が見られた。

8月初め、夏に向けて羊毛を刈り取り、羊をシャンプーしてさっぱりさせることになった。D子も、はさみを使って羊毛を刈り取り、みんなでシャンプーをして羊を洗った。D子は自分で刈り取った羊毛をうれしそうに袋に入れ、自宅に持ち帰った。

2学期に入り、D子の羊の世話の仕方が変わってきた。羊を怖がる様子もなくなり、小屋の掃除にも抵抗なく取り組む様子が見られた（写真4）。D子は、活動を振り返る作文に次のように記述している。

7月に入学しきをしてひつじさんが来たね。わたしははじめてどうぶつをかうからちょっとこわかったよ。8月にシャンプーをしてさっぱりしたね。けがりもしてけがすくなくなっちゃったね。7月から11月22日までお世話をしたけど、うんちをほうきでとるのがたいへんだったよ。おせわがじょうずになっとうれしかったよ。ひつじが大すきになったよ。(D子)



写真4 羊の世話をするD子

D子は飼育当初は羊への恐怖心や世話への抵抗があったものの、羊毛を手に入れた喜びを味わい、シャンプーをしてあげた達成感により、徐々に羊に親しみがわいてきた様子であった。羊毛というプレゼントを受け取り、羊への親しみが増したことで、世話への抵抗が薄れていき、大好きな羊のためにお世話をがんばろうと考えたのである。

5. 3. 2 羊毛を使って世界に一つだけの「ミニひつじ」を制作したE子

9月26日、刈り取った羊毛を使った工作を行った。担任が、羊との思い出をいつまでも手元に残しておけるようにと考え、児童の願いを参考にして教材研究を行い、小石に羊毛を巻き付け、手足と顔を取り付けて作る「ミニひつじ」を作ることとした。E子は図画工作の授業が好きで、羊との思い出を絵画で表す授業でも意欲的に制作活動に取り組んでいた。E子は自分で刈り取った羊毛を石鹸水に浸し、小石に丁寧に巻き付けながら貼り付けていった。そして、にこにこ笑顔の羊の顔を取り付けて「ミニひつじ」を完成させた(写真5)。E子は11月のあさがおのつるでリースを作る活動の際にも、残った羊毛を飾りとして使用した。「羊の毛が雪みたくに見えるでしょ。それに、もったいないから羊の毛を全部使いたいんだ。」と話すE子の姿からは、大好きな羊からもらった羊毛を大切に使いたいという思いや、羊との思い出を様々な形に残したいという願いが見て取れた。



写真5 ミニひつじ

E子は羊とお別れをしたあと、牧場の羊にあてて書いた手紙に次のように記述した。

いままでのいいことがあったね。ひつじさんがいたからミニひつじが作れたんだよ。おせわも、できなかったことができるようになったよ。ひつじさんといっしょにいっぱいあそんだね。ひつじさんがいてくれておもしろくてたくさんできたよ。本とうにありがとう。ひつじさんのことをわすれないよ。(E子)

E子の手紙からは、ミニひつじ作りを始めとして、たくさんの思い出ができたことに対する羊への感謝の気持ちが表されている。E子にとって、羊との出会いやふれあいの日々が充実したものであったことがうかがえる。とりわけ、ミニひつじ作りが印象に残っており、羊毛というプレゼントが、ミニひつじという宝物に変わったことの喜びが表されているととらえた。

5. 3. 3 羊さんのために牧場に返すことを決めたF子

11月に入り、本格的な冬が近づいてきた。妙高市は有数の豪雪地であり、このまま冬になると羊小屋はすっぽりと雪に覆われてしまう。児童は、冬も羊を飼い続けるかどうか、話し合いを行った。F子は羊が大好きで、自分がお世話当番の日ではないときも、昼休みに羊小屋を訪れては羊とかかわり、餌を与えたり散歩をさせたりしてふれあってきた。F子は、いつまでも学校で羊を飼い続けたいという気持ちはあるものの、厳しい冬の暮らしを想像し、羊のためには、施設の整っている牧場へ返したほうがいいのかと考え、話し合いでは「返したほうがよい」との意見を発表した。学級での話し合いの結果、11月22日に「羊さんの卒業式」をして、羊を牧場へ返すことに決まった。F子は、卒業式に羊との思い出をまとめたアルバムを作ってプレゼントしたいと願い、友だちとグループになってアルバム作りに取り組んだ。画用紙に思い出の写真を貼り、写真のまわりに出来事や思い出を書き込み、アルバムを作成した(写真6)。

卒業式当日児童はプレゼントを渡したり歌を歌ったりするなどして羊とのお別れをした。F子は羊と別れた後、作文シートに次のように記述した。



写真6 F子たちが作成した毛刈りの思い出アルバム

きょう、ひつじさんのそつぎょうしきをしました。アルバムをつくるのがたいへんだったけど、そつぎょうしきほんばんではみんなの心をひとつにできました。1年生のみんなはまい日がんばっておせわをしました。だからきつとひつじさんもがっこうにずっといたいとおもっているとおもいます。もっともっとひつじさんとなかよくなりたかったけど、いつかはおわかれしなきゃいけないし、ふゆになるとひつじさんのいえがゆきのおもさでつぶれちゃうかもしれないからかえしたほうが良いとおもいました。ほんとうはかなしいです。(F子)

F子は、羊のことを考えて牧場に返すと決めたものの、本心では「牧場に返したくない、ずっと一緒にいたい」と思っている様子が見て取れる。F子は葛藤をしながらも、羊の幸せを考えて別れを決断したのである。相手の立場に立ち、最善の方法を考えようとするとき、相手に対する愛着が深いほど、真剣に悩む。F子は、羊への愛着が深いからこそ、羊のことを真剣に考え、判断したのである。このように、羊と接すれば接するほど、羊との思い出がたくさんできるという互惠関係の中で、F子は羊への愛着を深めていったのである。

6 成果と課題

2つの実践における児童の姿から、児童と動物の間に互惠関係を企図する効果について、次の4点を挙げる。

○児童が動物に対して感謝や尊敬の気持ちをもつ

A男やB子のように、乗馬を通してたくさんの思い出ができたことに対する感謝の気持ちをもつ児童が多く見られた。また、乗馬という楽しい体験や羊毛という贈り物もらったお返しに、動物に喜んでもらえるように世話をがんばろうと熱心に取り組む児童も多く見られた。このように、相手に対する感謝の気持ちや、「動物ってすごいな」という尊敬の気持ちがより高まるのが効果として挙げられる。

○児童が動物に対して思いやりの気持ちをもつ

C子のように、動物の痛みや大変さを推測する児童が見られた。また、F子のように、飼い続けたいという気持ちを我慢して、羊の安全と幸せを優先して牧場に返す決断をする児童が見られた。このように、動物の立場や気持ちを推測して行動しようとするのが効果として挙げられる。

○児童が動物に愛着を深め、動物を友だちや仲間という存在としてとらえる

A男やD子のように、動物とのふれあいを通して動物と心を通わせ、友だちや仲間のようにとらえる児童が多く見られた。このように、動物をペットとしてとらえるのではなく、対等な関係として大切に飼おうとする気持ちを高めるのが効果として挙げられる。

○動物とかかわり、ふれあう活動が、思い出として児童の心により深く刻まれやすくなる

E子のように、動物との別れを経て、一つ一つの思い出をかみしめるように振り返る児童が多く見られた。動物とかかわりが深ければ深いほど、動物への愛着が深まり、動物と過ごした時間がかけがえのない思い出となる。このように、動物への深い愛着により、児童に忘れられない体験を与えることができるのが効果として挙げられる。

本研究により、生活科において動物飼育活動を設定する場合、児童と動物との間に互惠関係を企図することが、ねらいに迫る手立ての一つとして有効であることが示唆された。その際には、飼育する動物の教材としての特性やよさについて十分研究し、どのような互惠関係を企図することができるかについて検討することが必要である。

課題としては、本研究における調査対象がポニーと羊であり、一般的な学校では簡単に飼育することが難しい中・大型動物であることである。例えば、より多くの学校で飼育実践が行われているウサギやモルモットなどの小型動物の場合、どのような互惠関係を企図することができ、児童にどのような効果が得られるかについては検証していない。動物飼育実践が児童にとってより価値のある体験活動になり、学びの多い学習になることができるよう、より多様な動物について多面的に検証していくことが課題である。

引用文献

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』日本文教出版、2008、pp.34-35
- (2) 上越教育大学附属小学校『自尊心が高まる道徳教育と総合学習 自分をまるごと好きになる!』明治図書、2010、pp.84-91
- (3) 木村吉彦『生活科の理論と実践』日本文教出版、2012、pp.74-75

The Effect of Animal Breeding Activities by Contemplated the Mutually Beneficial Relationship between Children and Animals in the Living Environment Studies

Hiroshi YONEOKA* · Yoshihiko KIMURA**

ABSTRACT

Ministry's Curriculum Guideline of Living Environment Studies show we must bring up for children to enable pupils to become interested in the habitat of animals and plants, and their changes and growth through raising and growing them, to realize that they are living and growing, to be familiar with living things, and to be able to cherish them. It is necessary to devise the breeding of the animal. We studied the effect of animal breeding activities by contemplated the mutually beneficial relationship between children and animals. We investigated two breeding examples at pony and sheeps. We made the mutually beneficial relationship between children and Pony that 'Riding-Taken care'. And we made the mutually beneficial relationship between children and sheeps that 'Given the wool-Taken care'. The result of the study revealed that children have thanks and respect for animals. In other words children loved animals more deeply by contemplated the mutually beneficial relationship between children and animals.